

子どもは大人をきちんと評価する？

平成 24 年 10 月 理事長 片山喜章

どうってことないお話です。なかはら保育園には私が仕事をする部屋があります。そこは、いつ、どんなときも、誰が入って来ても「よく来たね」と歓迎することになっています。私の仕事のペースを少々乱されても、寛容にお相手をします。当初は「そろそろ、お部屋に戻ったら」と促してもなかなか戻ろうとしませんでした。しかし、誓って、あしらうような言い方はしませんでした。すると徐々に空気を読んで、ドアを開けて、中にお客さんが居ると「あっ」と言ってすぐにドアを閉める子どもが増えてきました。それでも、シタタカ？な子どもは、甘くてゆるい私の性分を見抜いて、来客があっても、シツコク居座って、私を試します。そんなときは「@@くん、いま、センセイ、お客さんとお話しているのわかるよね、さすがに年長さんだな」と退室しないうちから、ヨイショして自尊心に訴えます、すると無念さと納得の表情を混在させながら退室します。基本的に「自由に出入りしていいよ」という受容の空気を大人が醸すと、子どもは状況＝空気を読んで自主的に自製の気持ちを働かせようとします。

先日、日頃、あまり付き合いのない？5歳児の2人の女の子が『園内地図を作るので手伝って欲しい』と言って入室して来ました。頼りにされていることが嬉しくて、私は調子に乗って、私の仕事部屋の裏側が職員の着替えと休憩室になっている事を明かして、園児も保護者も知らない、その休憩室を案内しました。図面上の部屋と実際の部屋をリンクさせないと、地図づくりの保育の意味がなくなるからです。職員室の奥から迂回する構造になっていて、奥へ奥へと進んでいくと“なんで子どもをこんな所に連れていくの！？”と言わんばかりの先生たちの視線を感じながら、彼女たちを案内しました。「うわぁ～。こんなところ、あったん！」と古い民宿のような8畳の間に入って2人は感激していました。彼女たちの好奇心や探究心に精いっぱい応えた私に対して、2人は興奮気味に「給食、終わったら、また、来るからね」と言って2階に上がりました。(たぶん) お互い、気持ちのつながりを実感し合えた瞬間でした。

私はお昼から関東でしたから、胸を痛め、申し開きをするために、食後すぐに2階に上がりました。食事が終わりかけの2人に「ゴメンね、今からお出かけします」と詫びると「ふん！」と厳しい目つきになりました。まさに“女性の恐さ”そのものでした。何度もお詫びすると、無言で私を睨んで、ニヤッとしました(ホッと私)。

門扉を開錠して園の外に出たとき「バイバ～イ」というかわいい声が聞こえてきました。2人は下に降りてきたのです。一階のテラスの端っこから笑顔を覗かせて手を振ります。想定外のことに驚いた私は、道のまん中で、AKB48のコンサートの最前列に居る男の子のように、ジャンプしながら両手をいつまでも振り続けていました。